

芸術祭が始まる

東京藝術大学美術学部絵画科准教授
アーツ前橋チーフキュレーター

みやもと
宮本

たけのり
武典

⑨ 芸術家だけが開けられる扉

パリのマレ地区に住んでいた28歳の頃、よく散歩していたセーヌ川河岸とリヨン駅につながる線路に挟まれた寂しいエリアに、赤煉瓦造りの大きな廃工場がありました。怪しいキャンピングカーが周囲に停まっていたりしたので、いつも足早に通り過ぎていたのですが、ある日ゲートが開いていて、人々がにぎやかに集まっていました。

吸い寄せられるように工場内に入ってみると、なんとそこは若い画家や彫刻家たちの共同アトリエでした。貨物列車を敷地に引き込みこんでいたトンネルは即席の劇場になり、パリっ子たちがバンドの生演奏を楽しんでいました。暗がりに紛れて聴き入っているとフェルトの帽子が回ってきて、皆そこにチップを入れるのです。衝撃的でした。それまで僕は美術館や画廊しかアートを知らなかった。こんな自由なスタイルが可能なのかと。

放置された建物を芸術家などが不法占拠して活用することを、欧州では「スクワット」といい、後追的に所有者や行政が彼らの使用を許可するケースも多々あります。

駆け出しの芸術家たちが家賃の安いエリアに集まって楽しく暮らしはじめると、文化消費の起点となるカフェや書店などの小商いが引き寄せられ、やがてマルシェやフェスティブルが開かれるようになり、エリア全体が盛り上がり、いくこのようにアートを先兵的に使う再開発の手法を今日では「ジェントリフィケーション」といいますが、一方で成功して地価が上がると芸術家が住める街区ではなくなるという矛盾もあります。

実は今年、私たち東京藝大チームも、一つの素晴らしい

桐生の扉を開けることができました。重伝建地区の路地奥にある、わらに覆われた2棟の土蔵です。隣接して愛らしい木造平屋もあります。市外にお住まいの所有者によると「重伝建地区なので壊すことも賃貸物件にすることもできない。危なくなれば藝大さんの活動に使ってください。」とのこと。草木を慎重に払って扉を開け、風と光を入れると、予想に反して内部はスッキリと清々しい雰囲気。この春から学生たちと少しずつ修繕していきます。来年11月の芸術祭では、この土蔵も展示会場に加わるでしょう。



蔵の内部
(撮影：西村雄輔)



西村雄輔《地を起こし泳ぐもの 2025》

パチリいい顔

桐生っ子

市内に居住する3歳まで（申し込み時）の桐生っ子を募集します。

詳しくは、市ホームページをご確認ください。

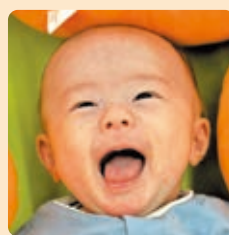
問い合わせ = 魅力発信課（☎46-1049）



あさみ るいちゃん
阿左美 瑠彩ちゃん
1歳3か月
(東六丁目)



あさみ りんちゃん
阿左美 綸ちゃん
3歳10か月
(東六丁目)



つるた せいじちゃん
鶴田 誠二ちゃん
8か月
(新里町小林)



かわぎし たいようちゃん
川岸 太陽ちゃん
3歳9か月
(境野町一丁目)

広告